

第四節 「かたり」の蒙昧性と多義性～主語と目的語の欠落

両手を合わせて祈るときには、自然に眼は閉じられる。市川浩は視覚はもっとも対象化作用が強く「視覚においては、主体としての身体と客体としての身体は明瞭に分裂し、触覚の場合のような二重感覚は成立しない」と述べ、精神病患者の症状でしばしばみられるのは、主体としての身体と客体としての身体の統合が損なわれるときであり、「体全体が借りものみだ、他人の皮膚をさわっているようで、つねっても痛くないと言ったりする」患者の症状な諸例をあげ、対象化作用が強い「視覚の問題」をとりあげている。ここでは天理の基本的な心身論である人間の身体は神からの「かしの・かりもの」であり、こころが我がの「もの」であるという教理を想起せざるを得ないが、身体の「能動と受動」の側面から、かり「もの」である心身論の探求も重要かつ独自の天理思想の一環として探求することが求められる。

「人の身上のしんは眼。身の内のしん、我が心の清水、清眼という」ということばで結ばれている前号で引用した『稿本天理教祖伝逸話篇』(170「天が台」)の背景には、応答の主題と思われる土俗的「裏守護」を分かりやすいたとえで説明しながら、深遠な天理思想に根差した心身論が語られていると直感できる。「天のしんは、月日なり。人の身上のしんは目」の「天のしん」とはやまことばで、字音では、芯・真・心・真・新・晋・親・神・清・進・深・審・針・診・伸・信・進・慎などが即座に連想される。眼は顔の上方に位置しているが、解剖学では顔とは言わずに内臓頭蓋という。天にては月日は両眼なりとも教えられるが、「この世の台は、天が台」は裏守護の「天台宗」(最澄)が聞き手には想起されたであろう。聞き手が剣術家であれば「清眼」とは、まさに敵の眼を目的に自分の剣先を向けて構える「正眼の構え」に意識が働くであろう。このように語りは文字でないゆえに、聞き手によって聞き方の浅薄にも違いがあり、したがって文字化された語りは、多義性や蒙昧性があることを抑えておくことは、語りの根幹にある思想を捉えるさいには重要であると考えられる。この語りの蒙昧性と多義性の認識は、散文ではなく和歌である「おふでさき」においても見逃せにできない解釈の領域であると思われる。

「おふでさき」の内容は《和歌としては》どういうことでもないが、《「このよふはりいでせめたるせかいなり なにかよるづをうたのりでせめ」と本人がいうように韻文でなければならなかった。韻文であることが、憑いた〈神〉《親神天理神》のことばであり、述べられたことばの意味には《中山みきのひながたとしての〈道すがら〉の実践的〈こと〉がらがなければ》何もないといつてよい。散文だったら何でもないことが、韻文であることで、一種緊迫感と〈何かである〉を付与している。憑かれたもの《神の〈言〉葉を實踐した〈者〉だけ》の力量といつてよい。

ここで吉本がいう憑かれたものとは教祖中山みきであり、憑いたのは吉本のいう親神「天理神」である。つまり親神と教祖中山みきは理念的には同一ではない。中山みきは神の絶対的「社」(やしろ)の立場に扱われたのであって、「社」は神が降りてくる場所(ところ)をいう。その証として教祖のことばのなかにも「しばしば神が現れる」というようなことばがあるが、『稿本天理教祖伝逸話篇』(22「おふでさき御執筆」)においても、次のような教祖の決定的なことばが史実として残っている。

教祖は、おふでさきについて、「ふでさきというものありましようがな。あんた、どないに見ている。あのふでさきも、一号から

十七号まで直きに出来たのやない。神様は、『書いたものは、豆腐屋の通り見てもいかんで。』と、仰っしゃって、耳へ聞かして下されたのや。何んでやなあ、と思いましたが、神様は、『筆、筆、筆を執れ。』と、仰っしゃりました。七十二才の正月に、初めて筆執りました。そして、筆持つと手がひとり動きました。天から、神様がしましたのや。書くだけ書いたら手がびれて、動かんようになりました。『心鎮めて、これを読んでみて、分からんこと尋ねよ。』と、仰っしゃった。自分で分からんことは、入れ筆しましたのや。それがふでさきである。』と、仰せられている。これは、後年、梅谷四郎兵衛にお聞かせ下されたおことばである。関連する歌として「おふでさき」においては、

いまなるの月日をもう事なるわ
くちわにんけん心月日や (十二—67)
しかときけくち八月日がみなかりて
心八月日みなかしている (十二—68)

というお歌が思い出されるが、そのほか九号の61～64番にも、
ぢきもつをたれにあたへる事ならば
このよはじめたをやにわたする
にはじまる連歌があり、天よりぢきもつを与える神とぢきもつを渡されるこの世の歴史的中山みきが神の「やしろ」である関係性の中に、両者の存在の区分がみられる。わたくしはこの中山みきの人神の実存性の前提なしに、現在の護教的な天理教学が存続するならば、世界の思想に拮抗できる倫理想や哲学は、現行の原典解釈からは直接創出できないと危惧している。

ちなみに、九号64番の
月日にハこれをハたしてをいたなら
あとハをやより心したいに

の一首には、2カ所において重要な目的語が欠落している。やまことばや日本語の主語の省略は和歌でなくとも日常的であるが、翻訳のばあいには主語や目的語の存在しない文章は主として欧米語においては文法的に成立不可能である。したがって、翻訳においてそれらを補足するのに意識はやむを得ないが、直訳には散文化的解釈がまず事前に必須となる。少なくとも旧来の英語訳『おふでさき』においては、たとえば「から」や「にほん」を例にあげただけでも、意識・説明訳が極端で等量移植に欠けた決定的な拙訳となっている。手元にある最近版は不翻訳で欄外にその意味を説明しているが、拙訳では「から」は the uninitiated、「にほん」は the initiated と等量移植的翻訳を行った。吉本の結語にみられる疑問や、たとえば蔵内数太、大橋良介、石田秀美、森本哲郎など教外の哲学思想者諸氏に独自の天理思想なるものを発見・構築・提起をしてもらい、教内者が感動しているようでは、天理教には自律的世界伝道への明るい将来は期待できない。

戦後直後に叫ばれた「復元」運動は、たとえば弾圧没収されていた原典の復刊や教派神道からの脱会だけではなく、あくまでも自力による独自の天理思想の構築であつたらう。安心安全な護教的な反復をこえて、対社会に新鮮なインパクトを与えるグローバルな天理哲学思想をシステムが一手一つに、あるいはそれが期待できなくとも真実に目覚めた一人ひとりの強固な天理「ふでとりがくにん」による停滞する現状を超越する覚悟が、決定的に必要とされる混乱した未曾有の時代にわたしたちはいま遭遇しているというたしかな認識と実践思想の確立が求められているのである。